

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

旭川医科大学紀要(一般教育)(2014.03) 第30号:41～56.

意識の構造(4)

田中 剛

意識の構造（４）

The Structure of Consciousness（４）

田中 剛

Tsuyoshi Tanaka

Abstract (reprinted)

Our hypothetical schema for the structure of consciousness is based on the synchronistic and diachronistic (transactual) structure of conscious being. This means that the brain is an organism which winds and unwinds its own time.

We know that the phenomenological reduction (epoche) is a conversion of the subject itself, which breaks free from the limitations of the natural attitude by placing them “within brackets” (Einklammerung). It cannot be a simple purifying process of consciousness, because it suppresses neither the reality of lived experience, nor the reality of things, nor of nature. Consciousness thus does not exclude nature. It goes beyond nature.

In relation to the organization and construction of the self, it is important to note that the self stands at the center of our schema. As concerns the development of the self, it is in a state of constitutional heteronomy, it has no autonomy (S. Freud). The formation of the self, on the other hand, is reduced to its own lack of recognition, that is, a knowledge or a recognition which is refracted through the prism of another’s image (J. Lacan). Lacan, as we know, described identification as the joyful assuming of one’s own specular image. The self establishes itself in the function of a radical misconception or denial.

R. Magritte illustrated this situation by denying the laws of reflected mirror images. The use of converging lines for painting the Last Supper looks normal in the eyes of the viewer, but it gives us an imaginary viewpoint. Mach lies on his sofa and the body is only partly seen. The cognitive space is illustrated, but his phenomenal space is ignored.

キーワード: 体験流 Erlebnisstrom、ノエシスーノエマ Noesis-Noema

6.0 意識主体が意識を意識するという事態は奥深い謎にわれわれを導く。意識というものはどのように構成されてくるものなのか、どのような構造をもつものなのかというこの根本現象についての疑問は果てしがたい。しかし、この「意識が構成される」という表現は正確さを欠くように思われてくる。自我主観がいったん措定されるということは、それに相即して「客観性」も、すなわち意識対象も構成されるのであって意識そのものが構成されるのではない。すなわち、「何か」が構成された後にそれが意識へともたらされるのではなく「何か」(対象と化した意識自体も含めて)は意識と相即して構成される、とするのが意識の本質規定に沿うことになるのではないか。

6.1 本論では意識のノエマ-ノエシス構造を取り扱う。そのような「何か」を引き続き探るためである。筆者は前号の末尾において幾何学的空間の次元性と意識との関連に言及した。もちろん、高次元幾何学と意識の存在論を一つの鉢に入れて混ぜ合わせれば「何か」が見えてくるというものではない。しかし、この「存在論」は「時間論」を抜きにしては考えられない。そこで問題となるのは、質料的形相学 (*materiale eidetische Wissenschaft*) に属する Husserl の現象学が、純粹形相学としての数学、とりわけ幾何学とどのように異なるのかということである。平易に言うと、前者は「還元された体験」とそれに本質的に属する「相関者」を超越論的に純粹な意識という事象領野において取り扱う。それに対して後者における本質看取 (*unmittelbare Wesensschauung*) は対象の質料、つまり形相的内実にはかかわらないし、また人間的主体も捨象する。これは公理にもとづく形式論理学と確定的多様体による「理念の看取」(*Ideation*) ということを意味し、もちろん自然現象に関する物理学的な感性的直観にも依拠しない。しかし、現象学と幾何学とはいずれも純粹本質の学問として実在的な現実存在に配慮はするがその確認の必要はなく、自然的態度からする経験や観察に依拠することも必要としない。また、いずれもが「明瞭な虚構」(*klare Fiktionen*)、「準現前化」(*Vergegenwärtigung*) すなわち想像の次元において本質認識の無限の地平を具えた本質可能性の広大な領野へと躍り出る。では、現象学が幾何学や物理学と決定的に異なる点はどこにあるのか。

6.2 現象学が欲するのは超越論的に純粹な体験の記述的本質論であり、物理学における素粒子のような極限概念的なものを措定しないし、幾何学のように理念的なものを目指すこともない。Husserl は現象学的本質認識の源泉について次のように語る。

〈Was irgend an reduzierten Erlebnissen in reiner Intuition eidetisch zu fassen ist, ob als reelles Bestandteil oder intentionales Korrelat, das ist ihr eigen, und das ist für sie eine große Quelle von absoluten Erkenntnissen.〉 Ideen 156

この一文は彼の言う「質料的形相学」の神髓を表明している。過不足なく的を射た宣言である。「還元された体験の実的成分と志向的相関物」という簡明な表現のなかに単なる記述主義を読んでではならない。なぜならば、「志向的体験」は本質的に現象学的空間、す

なわち、拡がり (Ausbreitung) を貫いて流れる意識流 (体験流) と捉えられているからである。ここに生じる時間は現象学的時間 (phänomenologische Zeit) と呼ばれる。これら二つの概念はそこにすでに在ることが前提とされているような物理的・宇宙的時空間とは異なる様態をもつ。以前・今・以後は過去把持・現在・未来予持へと変換され、同時性や継起性も含めて測定可能なものではなくなる。

6.3 Kant 的な純粹直観という意味での時間性の概念は、Husserl においてより純化されて (Ideation)、すなわち「理念を観て取る」体験を構成することは先に述べた。ここでは事物直感の成立は、事物が必然的に持続し、原理的にその持続に関しては果てしなく伸び広がるものであることを与件とする。先に述べたことから推論すると、幾何学的諸形態というものは事物としての理念化を経て時間性そのものを失うかに見えるかもしれないが、しかし、実的には変動する方向定位による射影対象、ないし投影物はそれでも依然として現象学的還元の後には時間性を内蔵しているものとして明らかになること、とりわけ志向的体験は、時間的射影の流れに根差しているのものであって、いわば幾何学的な理念化によって喪失したものを回復するのである。

6.4 いわゆる「零次元」からそれ以上の次元について語られる場合、通常使用者は慣用にしがって空間的次元を専ら思念する。そして、時間が延長の概念を基礎とする 3 次元空間に加わる新たな事象次元として想定されることがあるとしても、それが物体自体の存立の、あるいはマクロな 3 次元的物理的現象の核になることはない。時間はあくまでも空間に対して従属的な事象とみなされる。

筆者は『一般教育紀要第 29 号(2013)』所載の『意識の構造 (3)』の末尾の数節において、「時元」という言葉を使用した。その意図は、慣用化された次元概念が、意識現象学の観点からは厳密には使用不可能であるからだ。意識を延長 (Ausdehnung) として論じることにはできない。物理的測定は物理的現象にのみ適応されるゆえに、意識はその適用を免れている。もし、先の引用で見た本源 (Quelle) のような「点」があるとしたら、それが意識にとっての「零時元」であろう。前号の読者は例外なく「時元」を誤植、ないし変換ミスと捉えたであろう。しかし、これは本論中に頻出する「real vs reell」、「ideal vs ideell」のような概念対は意識事象領域の「時元性」に深くかかわっているのである。空間の歪みが重力場の存在を証明しているように、意識場の明証性が議論される際には、交合円錐の変様はその対象とされねばならない。逆に言えば、交合円錐交差面に変様した虚数空間が想定されたとしたら、それは意識場の存在を間接的に証明することになるであろう。いわゆる「錯視」はその純粋な適用例であるが、筆者が考察対象としている絵画、あるいは準絵画について言えば、いずれもが 2 次元平面上に射影する 3 次元空間が実現されているように見える。『晩餐』や『キリストの鞭打ち』が典型である。しかし、これでは「時元性」に関して何かは解明されたわけではなく、棚上げされたにすぎない。また他方、そう

した幾何学的説明を拒否するかのような絵画、すなわち Magritte や Vermeer の場合であるが、それらを高次元幾何学ないし「 n 次元多胞体」の観点から説明するとしても、その議論に「時元性」の問題は直接的に浮上することはない。試みに実数空間に定位した（ブール代数的）超立方体に二進数列をあてがってこの問題が解決するかというと、それはほとんど実現不可能であろう。筆者は、「虚数空間」の「実数空間」との相即性（Kohärenz）がこの謎の解決への一歩であると予感している。Husserl の「変様」概念は物理学的な空間の「歪み」の相関概念であって、次号で立ち入ったの検討がなされるであろう。

6.5 これまで準備的考察のなかで論じたことから導かれるのは、あるいは筆者が読者の脳裏から片時も離さないでいてほしいと願うところのものは、むしろこれら現象学的諸概念の「純粹さ」とは何かについて、また「純粹自我」が独我論的「我」（ego）と、とりわけ Descartes 的（C o g i t o）の主観とどのように異なるのかという疑問、さらには「超越性」、「次元性／時元性」そして「志向性」の錯綜した議論の本質にかかわる問題はまだ何一つ根本的に解決していないという認識である。

本論において当初から使用された諸概念、たとえば「理念的 - 実念的」、「実在的 - 実質的」という対立軸の名称や、「超越論的主観性 - 超越論的自我」、さらには「純粹自我 - 意識の流れ」という Husserl 現象学に特徴的な概念群がなぜ必要なのかを深く問うとき、われわれはそれらがいわゆる独我論に根差した単なる誇張表現であるとする誤解から解放される。すなわち、物理的自然における事物が延長的物体、時間的物体・物質的物体として規定されるのに対応して、意識も「広がり」と「内在的時間性」、そして無名の「何か」、つまり Husserl が「対照の意味におけるノエマ的「核」ではなく、その中心点をなしているような「或るもの」と呼ぶ「何か」（etwas, das sozusagen den notwendigen Zentralpunkt des Kerns ausmacht）Ideen 299 も具えていることが判明してくるからである。さらに進んで、現象学が先に述べた位相幾何学と物理学的高次元空間の中間相に位置して、両方向と相互浸透する可能性については、マイクロ・マクロの視点を越えた現代科学の未踏破領域であるとするれば、われわれの内在的時間意識（immanentes Zeitbewusstsein）が純粹意識としてこの相互浸透に対して何らかの思念を遂行するとき、そこで起きていることとは両次元との相互貫入を意味することになるであろう。そのとき、われわれはもはや二進数列に支配された知覚ロボットではないであろう。

7.0 Husserl の説くところによれば、物理的自然というものは意識との実的・実念的関連においてそれに対して超越的存在、意識のノエスーノエマ構成から思念対象としての固有の意味を受け取らなければ存立できないような超越的存在であり続けるとされる。こうした超越的存在に向かうべき還元された自我主観は「純粹自我」と呼ばれ、後に位相を変えて「超越論的主観性」とも称される。これは基本的に根源的意識であり、現象学的にそれ以上還元されえない原的概念である。ところが、超越的実在物が還元されぬままの自然

的態度の「我」(ego)によって何ら疑問視されることなく前提され、反対に世界の意識事象が数理・物理的に閉ざされたある特定の価値態としてしかみなされないとすれば、それはけっして Husserl の承認するところではない。これが彼の信念基盤である。しかし、物理的自然はわれわれが「我」(ego)を有しながらも身体的存在であることにより固有の内在的意識のフィルターを通過して多様な心理物理的に (psycho-physisch) 現出するのであれば、「純粹」という形容詞は誇張であり、かつ妥当性を欠くと判断されるかもしれない。せいぜい「理念」にとどまるべきとされるかもしれない。Husserl の思想的戦略は Descartes 批判を「われ思う」の「不可疑性」と「明証性」に関する異議申し立てから開始しながら、しかしこの原理の存在信念そのものを即座に廃棄するのではなく、むしろみずから Descartes における「我」(ego)の形而上学を現象学的「純化」によって転覆できるか否かを自らに問うという間接的な外観をもつ。すなわち、「我」(ego)の存在基盤である世界の「自明性」を問い直そうとするのである。その「純化」の試みは「判断停止」とも呼ばれる。「われ思う」の絶対的措定を Descartes 自身の世界解釈、ないし「信念」として全否定はない。しかし、「我」(ego)の本質の探求は手つかずのままであるとの認識が Husserl にはあったのである。すなわち、彼が「意識」とか「体験」、さらに「志向性」や「ノエシス・ノエマ構成」という概念を駆使して「生そのもの」への回帰を唱えていることは見落とされがちである。「我」(ego)本来の存在基盤は「流れる意識体験」であること、これである。こうした「我」(ego)は「超越論的主観性」と呼ばれる。

7.1 以上のような「我」(ego)の「明証性」と「不可疑性」についての議論が必要である理由は、これらの概念が本紀要の同表題既出論文(1)から(3)の各テーマと深いつながりがあるからである。Husserl の真意を確認しておく、十全なる明証性と不可疑性(疑いの余地がないこと)とは必ずしも一致しないのである。彼が超越論的主観性を措定するのも Descartes の超越論的實在論を回避するためであった。Husserl によれば、Descartes は生得的な自然科学的・数学的な演繹体系を背景にして「我」(ego)を、「思念する実体とみなし、切り離された人間の魂(mens)または靈魂(animus)とみなし、因果律の推論のための出発点にする」という「致命的転換」(eine verhängnisvolle Wendung)へと進んだのである。CM 26 何らかの「實在」のうえに、すなわち自然な自己経験の集積に依存して「我」(ego)を純化すること、究極的には実体化することによって全演繹体系の本源である超越的存在である自己に至る道を Husserl は「遮断」する。彼にとってこの時点で、自然な人間的自我は超越論的・現象学的自我へと変様する。世界は「我」(ego)の实的(reell)な成素ではない。

7.2 次に確認すべきは、Husserl の使用する現象学的概念の次元性(筆者の言う「時元性」)の問題である。これについては既存の研究に欠けていたと考えられるのでここで取り上げておく。本論末尾の図を参照されたい。斜めの軸、そこには超越論的な「主体」が位置す

るのだが、順を追ってノエシス軸に変換されてゆく。名称も変化してゆくが、事物知覚の主たる担い手としての実的な機能を引き受けることを意味する。具体的には、これら①から③までが表示するのは、Husserl 現象学においてその根幹を支える概念群の発展・進化の様子である。基底にはノエマ - ノエシス軸がある。超越論的な反省 (transzendente Reflexion) はこれら二つの方向性、すなわち「(我) 思う」(cogito) と「思われること」(cogitatum) をもつ。これはいずれの図においても共通である。大まかに言えば、ノエマ軸は「我」(ego) のまなざしが向けられる志向対象そのものの存在様態 (存在の確実性、可能性、蓋然性等) とともに存在の時間様態 (現在・過去・未来に) を、ノエシス軸は知覚・想起・過去把持における意識のあり方、そこに内在する明晰性・判明性などの様相を示す。知覚体験の実的成素といえば、感覚与件 (hyle) と統握 (Noesis) であるが、これらによって事物の志向的統一、「ノエマ的意味」が構成される、という論理だが、ここで本論にとって重要なことは、これまでの諸研究においてとくに強調されてきたし、また解明も進んだノエマの本質もさることながら、統握 (Noesis) の有する信念的意味賦与・定立の機能である。そして、さらにこれらの軸に加えて、右上から左下へ斜めに通る軸がある。ここにはいわゆる知覚の主体、判断の主体、すなわち超越論的な「我」が位置する。この軸は Husserl 現象学のいわば中枢神経系であり、いまだ解明されぬ問題を多く含んでいる。経験と体験、志向性 (志向的意識)、地平 (意識地平と地平意識)、時間・空間にかかわる議論とその意義については本論で語り尽くすことはできない。しかし、これまで通り、『意識の構造』(1) に掲げたスキームとこれらの図を基にして絵画と準絵画より厳密に観察する手法を維持したい。

7.3 再度、René Magritte の《複製禁止》に戻って考察する。この「鏡像」においては、一人の紳士の相貌が、つまり彼の前面が写されるのではなく、不合理にもその背後、すなわちこの絵を見るわれわれの視点からの実像がそのまま「写し」出されている、あるいは無造作に「貼り付け」られている。まさに《複製禁止》という奇妙なタイトルの具現である。鏡面における光の反射の法則に基づくならば、このような鏡像は存在しないことは明らかである。ただし、われわれが Alice のように鏡の裏側の虚の空間に忍び込むことができれば、ここでも同じ鏡像を見る錯覚に陥るかもしれない。鏡像の鏡像は元の物体である、などというようなことが数理的に通ることがあるとすればの話だが。とにかく、裏側に回ってもこの紳士は正面の顔を同定する手がかりすら見せはしないことは間違いない。水面を覗いたときにそこに自らの後頭部が映じたならば誰ととも眩暈を覚えるはずである。Magritte はこれほどの反論理の (準) 絵画をただ単に鑑賞者を当惑させるためだけに描いたのであろうか。幾何学的・群論的な対称性の規則にも反している。したがって、位数 2 の「coxeter 群」は残念ながらここでは通用しないのである。現象学的観点から言うならば、志向的体験の不可能性の条件がここに表現されていると考えられる。すなわち、超越論的自我が生まれるべき二つの軸、志向的体験の統握と統一の軸が機能しない様が描かれてい

るのである。この結論が導かれる根拠が問われる場合、「意識」概念そのものの、さらには「志向的体験」の指す意味を再吟味しておく必要がある。ただし、後者に関しては拡張された使用において、つまりある制限のもとでは前者と同一視されることが多い。

7.4 Husserl は意識概念の用いられ方を3つに分類している。LU 142-143

- A) 経験的自我の実的な現象学的成素全体としての、すなわち体験流の統一のなかでの心的諸体験の織り合わせとしての意識
- B) 自己の心的諸体験の内的覚知としての意識
- C) あらゆる《心的作用》ないしは《志向的体験》の総称としての意識

煩雑な解説を施すことをせず、ここでまず Husserl の見解の要点を述べるならば、3項目はいずれもノエマ - ノエシス構成における意識概念の現象学的特性とみなすことができる。すなわち、ノエマ的なものは統一の領野であり、ノエシス的なものは構成する働きをしている実的な多様な領野であり、この多様なものを機能的に統合すると同時に統一を構成するのが「意識」とされる。しかし、「意識」というものは恒常的には捉えられない。なぜなら、ノエマ的なものが必然的に射影の相のもとにあるにもかかわらず、たとえば視覚的に把握された対象の全体像の鮮明度が変動しようともそれ自体の同一性を保つのに対して、「意識」は同じものについての知覚の種々様々に異なった諸位相と諸射影とにおいて同一性を示さないとされる。Ideen 150 また、Husserl は意識概念の多義性からくる議論の錯綜を回避するための区分をさらに進める。まず第1に、現出する2つの事物、すなわち現象界の成員としてわれわれ自身に現出するわれわれと物理的事物や心的事物（物体や人物）との関係、第2に現象的主観（経験的な人物としての、つまりは事物としての自我）に対する現象的客観との関係、第3に意識内容の統一体という意味での意識（経験的自我の現象学的成素）と「体験」という意味での意識内容との関係の区別である。「事物の現出（体験）は現出する事物ではない。現出が意識の関連に属するものとしてわれわれに体験されるのに対し、事物は現象界に属するものとしてわれわれに現出するのである」。現出それ自身は現出せず、それらは体験されるのである。〈Die Dingerscheinung (das Erlebnis) ist nicht das erscheinende Ding. Als dem Bewusstseiszusammenhang zugehörig, erleben wir die Erscheinungen, als der phänomenalen Welt zugehörig, erscheinen uns die Dinge. Die Erscheinungen selbst erscheinen nicht, sie werden Erlebt.〉 LU 350

7.5 A) に関して

Husserl はわれわれが通常の意味で使用する体験の概念について現象学的な縁取りをする。その際のキーワード（Schlüsselwort）は〈HABEN〉である。意識そのものは上述したように、外的な事件や事物を体験、ないし経験的自我（das empirische Ich）に関係づけられ何らかの個別の措定の客観となった心的経験（psychische Erlebnisse）、すなわち実的な部分的成素や内容を内蔵してはいない。その手元に実的にある（vorhanden）のは事件

や事物の知覚やそれについての判断の諸作用と、またこの諸作用に伴う変動する感覚資料、統握内実、措定性格などである。しかし、現象学的還元された自我は、外的な事件や事物の個別的な「体験」の主体である経験的自我の所有する (*haben*) 知覚や諸判断の本質を自身の内在的成素として所有する。こうした自我は、諸体験の結合単位 (*Verknüpfungseinheit*) と呼ばれる。ここにおいて、それぞれの経験的自我、つまり個体的・事物的対象としてのわれわれの自我が還元され意識統一体へ、リアルな体験複合となることに限定するならば、自我はこの体験複合を自身のうちにあるもの、所有 (*haben*) しているものとして明証的に見出すことができるのである。自我そのものが結合単位であるからには改めて固有の自我原理を必要とすることはもはやない。

7.6 B) に関して

意識を内的意識 (*inneres Bewusstsein*)、すなわち内的知覚 (*innere Wahrnehmung*) の明証性によって根拠づける立場である。これは顕在的な現在の自我の諸体験に付随する自明性のもとに心理学的前提となる。しかし、Husserl はそれが十全的知覚 (*adäquate Wahrnehmung*) と解されているとし、「十全性」の意味を現象学的観点から厳密化する。というのも、彼の観点は諸体験の純粹現象学的基づけであるからである。すなわち、「十全的知覚」とは知覚体験自身の内部で直感的に表象され、実的に与えられていないものは何一つ知覚自身の対象に付加しない知覚のことであるとされる。「厳密な意味で有体的に現在し (*leibhaftig gegenwärtig*)、ありのままに、余すところなく」把握されること、「対象が知覚作用それ自身のうちに実的に含まれていること」である。彼はこのように規定することによって、意識を直感的な知識の一種とみす一般的傾向、また現象学的体験に抛らない自然科学的理解がもたらす多義性を回避し、それらと一線を画そうとするのである。

7.7 C) に関して

Husserl の説く純粹統覚の自我、すなわち純粹自我の概念は、本論の枠内では語り尽くすことのできない含蓄を有しているが、上述した内容との関連に限って述べるならば、「志向的諸体験」とのかかわりなかで浮かび上がる意識についての規定が中心となる。すなわち、現象学的・顕在的所与へ還元された経験的自我は、次に精神的自我の装いで反省的に把握されるあの諸体験の複合をわれわれに提供する。Husserl は「意識統一体」、「志向的諸体験」の概念を自我主観全体にまで拡張することで超越論的自我の構成の一步手前までたどり着く。「自我の身体、精神的人格としての自我、および経験的な自我主観全体 (自我、人間) を志向的客観とする志向的諸体験も意識統一体の現象学的な全体的成素に属しており、そしてそのような志向的諸体験は同時に現象的な自我の本質的な現象学的核心を形成している、としか理解できない」。 (*Die bewusste intentionale Beziehung des Ich auf seine Gegenstände kann ich nicht anders verstehen, als dass zum phänomenologischen Gesamtbestand der Bewusstseinsinhalt eben auch solche intentionale Erlebnisse*

gehören, in denen der Ichleib, das Ich als die geistige Person und so das ganze empirische Ichsubjekt (Ich, der Mensch) das intentionale Objekt ist, und dass solche intentionalen Erlebnisse zugleich einen wesentlichen phänomenologischen Kern des phänomenalen Ich ausmachen.) LU 361

7.8 Husserl の厳密な現象学的立場の出発点としてこの見解は重要である。彼の師、Brentano の立場を批判的に、いわば校正することが大きな課題とし彼の念頭にあったのである。たとえば、それは以下のような彼の諸判断に現れる。すなわち、「何らかの事物や対象の体験とそれと並んでその対象に向かう志向的体験が体験される」のではなく、唯一の志向的体験が現在するということが、志向的体験というものは意識ない自我と意識された事象との間のリアルな関係作用でもないし、意識のうちの実的な作用と志向的客観との関係を指すのでもないこと、志向的体験をスコラ的に志向的ないし心的内在 (intentionale oder mentale Inexistenz) から導出してはならないし、同一視してもならないことなどである。Husserl によれば単純なこと、すなわち対象は唯一の志向的体験のなかで心的・物理的の区別なく思念 (gemeint) されており、狙われており (abgezielt)、意識に対して原的に現出するのである。彼は言う、「私が見るのは色彩感覚ではなく、色のついた事物であり、私が聞くのは音響感覚ではなく、歌手の歌である」。(Ich sehe nicht Tonempfindungen, sondern das Lied der Sängerin.) LU 375 ただし、Husserl は意識の分類A) にあるような、「体験流」と「体験流を実的に構成する諸契機」を一様に意識されたものとして表示する心理学的不正確さについて、また意識という言葉を内部知覚とか志向的關係という意味で使用するのを暫定的に容認する。術語にかかわる多義性と混乱の可能性に留意しつつではあるが。

8.0 すでに述べたように、自我というものを Husserl は「体験する現象学的自我 (= 純粹統覚の自我 = 純粹自我) は個体的・事物的対象」であるとしている。この考えの根底には、「原初的な自我を必要不可欠な、統一的、主観的な現出との関係の中心」とは認めないという姿勢がある。この認識はある意味で既存の心理学的観点に対する挑戦、当時のカント哲学流の自我理解の自明性に対するコペルニクス的転回であろう。一般に Husserl の思想が近づきがたく受け止められてきたのには、この辺の事情があると考えられる。筆者は以上のような準備ののち、以下で (次号にも続くが) 筆者の見解であるところの「Husserl の純粹自我は純粹意識のノエシス軸上の相関物である」ということについて説明する。その際、これら二つの概念の意味内容と超越論的機能の要点を掲げ、それらがノエマ - ノエシス構成のなかでいわゆる「自我主観」(Ichsubjekt=ego) として、つまり現出の結節点としてどのような相貌を呈するのか、またその相貌のもとで、Magritte から Vermeer までの絵画資料についてどのような新たな解釈が可能となるのかを論じたい。

8.1 Husserl は「意識はそれ自身としては完結した一存在領圏として把握される。この領圏は〈内在的時間性〉という固有の形式を備えている」との認識に基づき、Descartes 的な〈Ego〉に対して現象学的還元を遂行し、ついには超越論的主観性 (transzendente Subjektivität) にたどりついた。「超越論的主観性は、その超越論的な諸体験、諸能力、諸動作を具えていて、直接的に経験される一つの絶対的に独立した王国なのである」Ideen 16。ともかく、われわれは現時点で内在的時間領圏について何も知らないが、Husserl の言うこの「意識」を「自我主観」と置き換えることにほとんど矛盾を感じないのではなかろうか。そして、この「自我主観」の属性としての「内在的時間」とは何かを問おうとするのではないであろうか。しかし、事はそのようには運ばない。本論末尾に添付してある①から③の図のなかのどの軸にも「意識」(Bewusstsein) は現れない。図の斜めの軸には、「経験」(Erfahrung)、「体験」(Erlebnis)、「志向性」(Intentionalität) と記されているが、これらの概念はいずれも意識そのものの表示ではない。意識のノエシスの相関概念である「志向的体験」(intentionale Erlebnisse) という表現はすでに登場させておいた。「意識」はこのままの形で現象学的還元のものには精神物理的な (psychophysisch)、ないし心的な (psychisch) 付属物が削ぎ落とされた意味で使用されることもあって、前後の脈絡を押さえておかないと混乱する。そして、これら諸概念、つまりノエマ-ノエシス構成における純粹自我、純粹意識、志向的体験は形相化されない心理学においてはいずれも単独で「意識」と表現されることも稀ではない。Husserl も告白しているように、発展途上の形相的現象学 (eidetische Phänomenologie) 研究において、諸概念の発展的精密化の要請の発信はいつでもどこにおいてもなされるべきことなのである。「意識とはそれ自身からして本来おのれがそれについての意識であるところの或るものを指示する」。〈Eben Bewusstsein eo ipso deutet auf etwas hin, wovon es Bewusstsein ist.〉Ideen 194 これは「意識というものはまさしく或るものについての意識に他ならない」。〈Bewusstsein ist eben Bewusstsein von etwas.〉Ideen 196 と同義である。Husserl がこのように述べる時、超越論的主観性による幾何学的次元性、物理的次元性、そして純粹現象学的時元性の結合、ないし相即を視野に入れている。超越論的主観性はDescartes 的「我」(ego) ではなく、これら各次元を織りなす重層的原理のひとつの名称にすぎない。意識の地平の奥にはさらにその奥の地平が続いているのである。

8.2 強められた〈C o g i t o〉でさえ地平をもつ。この作用を解析するための術語にも不確定性が纏いつく。Lacan 風に言えば、Descartes の意味での「目覚めた自我」の体験流は、そのシニフィアンの連鎖たる「コギト作用」〈C o g i t a t i o〉を内在的時間意識のなかで顕在化する。自我は顕在性の変様する時々刻々のポテンシャルに応じたシニフィエを、すなわち対象の個別の現出をもたらす。しかし、変わらぬ「意識そのものの本質」がある。これが「志向的体験」である。よろしい。たが、Husserl はいくたびもさりげなく、主観 (=自我) を「自我のまなざし」(Ichblick) ないし「精神のまなざし」(das geistige

Auge) と呼んで、それが〈Cogito〉の作用の主体としての主観ではないことを示唆している。「コギトというこの特有の作用そのものの本質には何かを精神的なまなざしにおいて、つまり精神的な眼において持つということが属しているが、それ自体ある固有の作用などではなく、また何らかの知覚作用と取り違えられてはならない」。〈Das zum Wesen des cogito, des Aktes als solchen gehörige im Blick, im geistigen Auge Haben darf nicht mit einem Wahrnehmen verwechselt werden. 〉 Ideen 75

8.3 ここで、本論が今後迎える題目の道筋を提示しておく。作品分析のための基本構成は以下のようなになる。

〈考察対象作品〉	〈適用される範疇〉
① Magritte / Mach :	ノエマーノエシス軸構造
② da Vinci / della Francesca :	純粹自我
③ Vermeer :	純粹意識

8.4 筆者は以上のような分類のもとで以後の分析を行う。

① の Magritte と Mach から始めよう。これら二つの視覚対象としての描画は（色彩がであろうとなかろうとこの際問題としない）観る者に対して極めて対照的に映る。前者においては、鏡と思しきものの前に立つ人物の背面が光学的法則に違反し、他方後者は超越的な視点を内在化した人物の視角がとらえた「現実の」光景である。

「あるものについての意識」(Bewusstsein von etwas) とは、すでに紹介した現象学的・志向的体験の基本認識である。たったこれだけのことから①から③までのノエマーノエシス軸上に（外見では二次元表示であるが）多次元的に超越論的な諸概念が配置される。そもそも「或るもの」とは何か。この「或るもの」を意識することがわれわれのなかでどのように構成されるのか。これはしかし自明なものでありながらまったく捉えがたいものである。その構成の場面を直接体験したものは一人もいない。志向的体験としての知覚体験である二つの例について現象学的還元を遂行するとすれば、どのようなことが起こるのか考えてみる。エポケーに基づく内在的な本質分析は超越的現実存在を括弧に括るということ、それについての判断を停止することから始まるが、このような抽象的な表現では理解されにくい。われわれの通常の分析的態度は、知覚される対象を实在物であると前提して、われわれの主観性を極力減じながら捉えようとするか、反対にわれわれ知覚する存在者の实在性と対象の实在性の両方を前提として、前者の主観性をあえて主題化する観点を採用かであろう。しかし、エポケーはむしろ眼差しを知覚作用に向けるのである。すなわち、対象の本質所与性に忠実に従おうとするのである。

8.5 Magritte は後ろ向きの人物を模写しつつ、それを一つの枠のなかに閉じ込める、ない

し括弧に括る。Mach は自らの顔の輪郭を描きこむことにより、眼前の室内空間を括弧に括る。これすなわち、われわれ鑑賞する者にも同様の手続きを要請しているとの解釈を可能する。この還元によって何が変化するのか。現実的客観に対する志向的客観が人物の本質についてのノエマの意味をともなって定立されるのか。しかし、現象学的還元は志向的客観を定立するためのものではない。知覚のノエマについて言えば、それは知覚対象を括弧に括るだけである。この操作によって「現実の」知覚対象は或るノエマの意味を核とする、すなわち純粋な対象の意味を核とする「何ものか」に変様する。「現実の」知覚対象でなく、他の意味的諸契機、たとえば想起の対象であれば想起のノエマの意味、予持の対象であれば予持のノエマの意味が核となる「何ものか」が体験されるわけである。それぞれの核のまわりは、ノエシス軸における異なる定立様態により生成される知覚対象の他の種々のノエマの意味によって重層的に取り巻かれている。ある一つの志向的对象の意味的諸契機の複合は「全きノエマ」(das volle Noema)と言われる。

8.6 この段階で、つまりノエシス - ノエマ構成の理論的背景について述べる前に、本論を貫くアフォーリズム風の精神に則って、現象学的還元における「志向的客観」(intentionales Objekt)に関連する留意すべき要点を掲げておく。

Magritte と Mach の例が鑑賞者の目に不合理に映る理由の主たるものには、これらの例そのものからではなく、むしろわれわれの習慣となっている超越的自然の定立、より具体的には非還元的・自然的態度がある。もし、一つの知覚された事物が志向的客観(内在的客観)と現実的客観(知覚された自然事物)という二つの実在物(Realitäten)の合成体であるとするならば、しかも、後者の存在・非存在、生成・消滅にかかわらず前者、すなわち志向的客観というものが志向の働きに実的に(reell)内在するとするならば、それは現象学的還元が本来めざすことでは決してない。われわれは或る自然客観たる事物を知覚するのであって、他ならぬそのものが知覚的な「志向の働き」と称されるものの現実的客観なのである。現実的な事物の、「第二の内在的事物」のような表現はありえない。現実的客観(現象学はこれに括弧付けをするのであって、観念論的に否定したり、抹消したりはしない)に対して内在的客観(immanente Objekte)があること、後者が現象学的還元のもたらす「客観」であること、「内部的写像」(inneres Bild)のようなものは存在しないことを押さえておく必要がある。ともかく、Husserl も強調するように、「内在的客観」のノエマ的観点からの記述は、ある種の写像理論に基づくのではない。模写意識による模写像は上と同じ論理で第二の志向性を有する心理学的実在物を想定する。この想定は、またもや内在的客観と現実的客観の区別、分離を要求することになるのである。以上で今取り上げている二枚の絵が単なる心理学的な意味における模写意識の産物ではないことを確認した。

8.7 Magritte と Mach の例に戻ろう。筆者は前号で前者に〈psychozentrisch〉、後者に

〈phänozentrisch〉という限定形容を付した。実はこれらは純粹体験の所与のノエシス軸における意味賦与の在り方を指していた。すなわち、前者は心理的虚構物として、後者は生身のありありとした現実として、それぞれ固有のノエマ的相関者を意味する諸性格 (Charaktere) を指していたのだが、なぜそのような特徴づけがなされるのかについては今後の分析のなかで明確化されてくるはずである。

さて、一般に心理学的観点からすると、二つの準絵画について共通して主題化されるべきは純粹自我や純粹意識であろうと思われがちである。しかし、これらの概念の適用は先のプランに示した通り、他の諸例を論じる際になされる。というのも、これらの絵は純粹絵画というよりも、現象学的方法の特徴の視覚的な範例としての意味を多分に含んでいるからである。それは端的に言う、「志向的体験とその根底にあるノエシス・ノエマ構成の視角化」ということである。

8.8 これまでの議論の前提となっている現象学的態度 (Einstellung)、とりわけ「外部知覚」についてその基本事項を整理しておこう。(いわゆる内部知覚ないし内的知覚という表現に関する Husserl の慎重な見解を留保したうえで) 自然科学的に理解されている「外部知覚」とは感覚、連想、想起などにカテゴライズされた生理学的・心理学的実在物に関連付けられた知覚のことである。すでに述べたように、この理解の仕方に対する現象学の態度はまさに〈Ich sehe nicht Tonempfindungen, sondern das Lied der Sängerin〉である。すなわち、われわれの知覚するのは感覚そのものではなく多様な対象物である。知覚された対象は知覚のなかに含まれるのではなく、われわれは知覚することにおいて対象物へと方向づけられ、知覚という様態において自己をその対象物に関係づけるのである。意識が自己を或るものへと関係づけることは、「作用」と呼ばれる。しかし端的にこれは「志向性」のことである。いずれの呼び名も心理学的領圏において多義的に濫用されてきたので、Husserl はわれわれに常に警戒感を緩めずに使用することを勧める。すでに述べたように「志向性」の概念 (der Begriff der Intentionalität) は現象学の発端において「まったく不可欠の出発点をなす概念であり、根本概念」(ein zu Anfang der Phänomenologie ganz unentbehrlicher Ausgangs- und Grundbegriff) Ideen 191 である。しかし、Husserl はこの概念を専ら「志向的体験」と性格付けられないような「体験」をも貫く「一つの普遍的媒質」(ein universelles Medium) と捉えて、単なる「知覚」を越えた「意識」の構造、すなわちノエマ・ノエシス構成においてそれを本質規定する主要概念と位置付けているのである。

8.9 Magritte においても Mach においても、実はただ一つの現象学的に還元された「知覚」があるのであって、実在物としての「内部」知覚や「外部」知覚が存在するのではない。「知覚与件」すなわち広義の「感覚与件」(触覚与件や音響与件を含み、それ自体としては志向性を含まない)、ないし感覚諸契機が「これを生気づける意味賦与的な、もしくは

意味賦与を本質的に内含するところの1つの層」(eine gleichsam beseelende, sinngebende, bzw. Sinngebung wesentlich implizierende Schicht) Ideen 192 を介して「体験与件」を構成し、これがさらに具体的な「志向的体験」として成立してくるのである。Husserl は厳密を期して、感覚諸契機を「感覚的ヒュレー」(sensuelle ὕλη)、体験与件を「志向的モルフェー」(intentionale μορφή) と呼ぶ。「志向的体験」をもたらす「1つの層」とは何か。ここにおいて Husserl は意識を意識たらしめるものとこの「層」を同一視する。それは「ノエシ的契機」、端的に「ノエシス」である。これは本論にとりわけ重要な個所なので、この術語がなぜ選ばれたかの経緯も含めての彼の説明を聞くことにする。以下に引用する。

〈Was die Stoffe zu intentionalen Erlebnissen formt und das Spezifische der Intentionalität hereinbringt, ist eben dasselbe wie das, was der Rede vom Bewusstsein seinen spezifischen Sinn gibt: wonach eben Bewusstsein eo ipso auf etwas hindeutet, wovon es Bewusstsein ist. Da nun die Rede von Bewusstseinsmomenten, Bewusstheiten und allen ähnlichen Bildungen, und desgleichen die Rede von intentionalen Momenten durch vielfältige und im weiteren deutlich hervortretende Äquivokationen ganz unbrauchbar ist, führen wir den Terminus noetischer Moment oder, kürzer gefasst, Noese ein.〉 Ideen 194

下線を施した個所はすでに紹介した意識の定義である。「意識の諸契機」とか「意識性」、また「志向的契機」などの表現が、意識を意識たらしめる層を括る名称としては不完全なものであることをノエシス概念導入の理由として掲げている。それでは、われわれの準絵画二例における「感覚的ヒュレー」、「志向的モルフェー」、「ノエシ的諸契機」とは何か。

われわれには Magritte の場合であれば、手前の人物と、知覚の対象として彼の意識へともたらされる第二の人物の隠された眼差し、そして鏡像と思しき現出性格が、また Mach の場合であれば、輪郭の一部しか見せないがともかく実在する Mach 本人と、自己自身が知覚対象の構成者としての意識へともたらされる隠された眼差し、そして現実的空間の現出性格が与えられるだけである。これらを、つまり今われわれは正確には絵画ではなく、準絵画と敢えてとられた「絵画」を観ているのであるが、「ノエシ的諸契機」をこの枠内で考察する場合、Husserl の言う「中立変様」(Neutralitätsmodifikation) ないし中立化された現存在定立の相の志向的体験が導きとなる。知覚の現象学的意味そのものは不変だが、中立変様においては「定立」の質が異なってくるのである。そもそも現実を捕えるわれわれの「知覚」にはそれが「知覚」であるというだけで何か或る事物が自我に対して生身のありありとした現在において現出していることが属しているのみならず、自我がその現出している事物を認知 (gewahr werden) しており、その事物を現実的に存在するものとして把握し定立する (das erscheinende Ding als wirklich daseiend erfassen) ことをも意味している。それゆえ、「知覚」というものは「意識対象性の構成」(Konstitution der Bewusstseinsgegenständlichkeiten) へともたらされなければ単なる動物的身体機能として感覚的与件の数的な集合の一部にとどまるしかない。ところが、意識対象性の構成は脱・

還元された(大胆な表現を使用させていただくが)想像(ImaginationではなくPhantasie)の志向的体験によって実在の時空間を超えて遂行されうるのである。ここで必要となるのはノエシスの諸契機の発動である。ノエシスとはすなわち、「素材的なものを生気づけながら、また互いに組み合わせられて多様かつ統一的な連続と総合とになりながら、或るものについての意識を成立させて、その結果、その対象性の客観的統一がそこに調和的にはっきりと表わされ、証示され、かつ理性的に規定するもの」(Noesen, die, das Stoffliche beseelend und sich zu mannigfaltig-einheitlichen Konstiuen und Synthesen verflechtend、Bewusstsein von Etwas so zustande bringen, dass objektive Einheit der Gegenständlichkeit sich darin einstimmig bekunden, ausweisen und vernünftig bestimmen lassen kann.)である。Ideen 196

Magritte の、こちらに背を向けた人物が知覚しているもの、顕在化されているもの、そして Mach 自身の視界が把握しているものは、「内在的客観」の二様の現出の仕方である。しかし、想像現出(Phantasieerscheinung)と知覚現出(Wahrnehmungerscheinung)、そしてこれらと中立的変様との関係にかかわる問題は次回に譲るしかない。PZ453

(以下次号)

- * 本文中の下線部はすべて筆者が付したものである。
- * 引用文において、原本のイタリックス字体を簡明のために踏襲していない個所がある。
- * 筆者は本論において哲学的概念の意味論領域に生じがちな、定義らしきものを求めての無限後退(endlicher Regress)を避けるため詳細な註釈をあえて付けない。よって主たる参照箇所のみを表記した。
- * 使用した Husserl の著作、および他の参考文献は以下の通りである。

Husserl, Edmund : Ideen zu einer reinen Phänomenologie, Felix Meiner Verlag, Hamburg, 1992. Ideen と略記

Husserl, Edmund : Logische Untersuchungen II/I, Max Niemeyer Verlag, Tübingen, 1993

Husserl, Edmund : Vorlesungen zur Phänomenologie des inneren Zeitbewusstseins, Max Niemeyer Verlag, Tübingen, 2000. PZ と略記

Husserl, Edmund : Cartesianische Meditationen, Felix Meiner Verlag, Hamburg, 1992. CM と略記

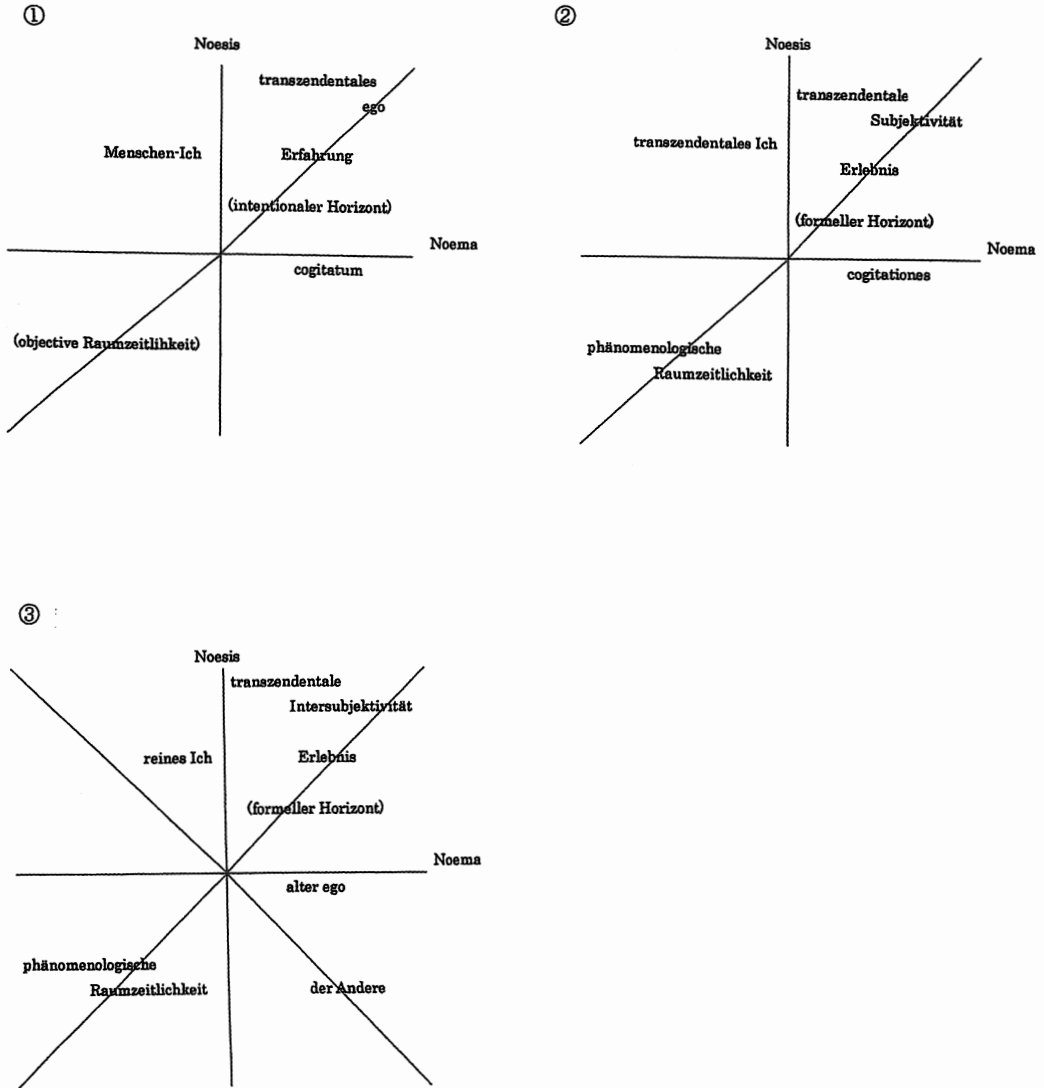
Kant, Immanuel : Kritik der reinen Vernunft, Felix Meiner Verlag, Hamburg, 1998.

Penrose, Roger : The Emperor's New Mind, Oxford, 1989.

Coxeter, Donald : King of Infinite Space, New York, 2006

Kauffman, Stuart : Investigations, Oxford, 2000

Schematische Darstellung für die «Noema-Noesis Konstitution»



(たなかつよし 近代・現代ドイツ文学／現象学／心身哲学)